

# 近世土佐家の屏風絵粉本

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2017-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松尾, 芳樹 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15014/00000115">https://doi.org/10.15014/00000115</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 近世土佐家の屏風絵粉本

松尾 芳樹

## 【抄録】

京都市立芸術大学芸術資料館が所蔵する《土佐派絵画資料》の中には屏風絵の粉本が多数遺されている。白描による原寸大の模本と下絵が大部分だが、縮図や小下絵も含まれる。古いものは17世紀初期に制作された土佐光則による源氏物語絵の模本である。光則の子光起と孫光成の時代には真景図を意識した名所絵に独自の表現を見せ、光成の孫光芳以後は古典的で穏健な表現によって宮廷絵所の職責を果たした。これらの粉本には、近世の土佐家累代の特徴が表現されており、彼らが屏風という絵画形式を重視した様子がわかる。

## 1. はじめに

京都市立芸術大学芸術資料館が所蔵する《土佐派絵画資料》は、やまと絵の画系として近世の京都で活躍した土佐家に伝えられた粉本及び文書である。この中には屏風絵に関わる粉本も少なからず遺されている。

屏風は7世紀に新羅からもたらされた調度で、初めは縁を廻した細長いパネルを革紐などで繋いだものだったが、中世に紙の蝶番が考案され、現在のような形状となった。この屏風が建築空間の間仕切りとなり、屋内外で風よけとなるのは、その柔軟性と移動性の高さによる。表面の装飾に絵画が用いられることも多く、押し絵貼りのほか、各扇を連続させた大画面構図で描かれることもある<sup>1)</sup>。宮廷調度として長い歴史を持つ屏風は、宮廷絵所として活動した土佐家にとって、重要な絵画形式であった。

近世の土佐家からすれば、中世の土佐家から家業を継承したという由緒が、自家の正当性の拠り所である。近世土佐派の源流は15世紀初期の土佐行広を祖とする中世の土佐派にある。宮廷絵所預を務めた土佐光信は、中興として流派を確立させるが、戦国時代末期にその孫光元が戦いの中に倒れ、血脈は途絶えてしまう。光信の子光茂から文書、絵本を譲り受けた弟子光吉(1539-1613)が流派を継承し、彼の孫光起(1617-1691)の時代に絵所預に復して近世土佐派が成立した。中世以来の土佐派が継続して関わりを持ち続けた絵画形式のひとつが屏風である。近世の土佐家においても特別な意味を持つ制作物なのである。

別表としたのは《土佐派絵画資料》中に確認される主要な屏風関係の粉本である。原寸大の下絵や模本の他、雛形となる小下絵や縮図が含まれる。これら粉本の解題を通して、近世土佐家絵師と屏風との関わりを概観したい。



図1 源氏物語図屏風模本

## 2. 屏風を写す

土佐光起が宮廷絵所預に任ぜられて以後、中世の土佐家を継承する家として土佐家の権威は高まったと考えられる。そのため、古画鑑定の機会も増加し、閲覧に際して原本の模写を行うことも少なくなかった。近世の土佐家にとって中世土佐家との継承関係を確認するためにも古画は写され、さらに参考とすべき作例があればこれを写して蓄蔵した。光芳の時代には、かなり多くの古画模本が収集されていたことが知られているが<sup>2</sup>、現在もなおその一部は遺されている。

### A 《源氏物語図屏風模本》

土佐源左衛門すなわち光則（1583-1638）の手になる源氏物語図屏風模本。墨書に「十二枚ノ内」とあるが、現存するのは6枚のみ。原本は土佐光茂の作と考えられている今治市河野美術館所蔵《明石・浮舟図》<sup>3</sup>である。現存部分は六曲一双屏風原本の右隻にあたる《明石図》で、細部の色指示の詳細な表現と描写的確さから、下絵の模写ではなく本画に基づく模本である可能性が高い。17世紀初期の模写と考えられ、屏風絵の粉本としては本資料の中でも古いものといえる。全てに朱文方印「画所預之印」がある。

### B 《源氏物語図屏風模本》

源氏物語を画題とする小屏風の模本が2点遺る。ひとつは紙中に「たけ一尺二寸三分はば二尺一寸二分」と屏風の大きさを書いているため、現在の寸法から二曲小屏風の原寸大白描模本と思われる。場面は物語の「胡蝶」から光源氏の住まい六条院における春の遊樂の有様で、龍頭鷓首の舟や迦陵頻と胡蝶の姿をした童舞が描かれる。金雲の描写から金地著彩画であることが推測され、図様からは原本が土佐派の絵師によるものと推測される。模本の制作者は墨書の特徴から光起の可能性もある。もうひとつは「光信筆。極遣候。」の墨書がある白描粉本で、鑑定の依頼に際して手控えとして速写したものであろう。特に屏風である旨は記されていないが、全体の比率と六つに折り目をつけた形状から屏風の縮図と考えたい。画面を縦に区切り、諸要素に横方向への広がりのない構図で、現存する作例では類するものが見当たらない。場面は物語の「蓬生」「篝火」「須磨」「明石」「橋姫」「葵」から採られていると思われる。

### C 《東海道図屏風模本》

元禄4年(1691)7月に土佐光成が二代山本春正(?-1707)から借用して模写した東海道図の模本。構成から見る限り、原本は六曲一双屏風であった可能性が高い。原本屏風からの模写であったか、12枚組粉本からの模写であったかはわからない。右隻は品川から舞坂まで、左隻は新居から大津までの53宿を描く。精写ではないが、図の要所を捉えており大きな写し崩れはない。東海道図としては菱川師宣による《東海道分間絵図》が元禄3年に刊行され人気があった。江戸から京都への道程に高い関心があったことが知られるとともに、絵師がこうした分間図によって多くの情報を得る環境が生まれたことがわかる<sup>4</sup>。絵は狩野派系の絵師の手



図2 東海道図屏風模本

になると考えられるが、街道を細かく上下に屈曲させながら画面右から左に向かって展開する。概ね画面の下半に街道が描かれ、上半分は背景としての山にあてられることが多く、装飾性よりは南側から俯瞰した実感を反映させた画面構成となっている。宿場間の里程の書き込みが多いのはこの図が分間図から展開したものとする根拠となる。二代春正は蒔絵師先代春正の子として生まれた。家業を受け継ぎ蒔絵師となるが、こうした東海道図はまた工芸品の図案ともなったのであろう。

#### D 《祭礼法会図屏風模本》

2扇分2枚のみが遺る。1枚に「従四位下刑部大輔藤原光信筆 土佐左近将監光成證（正六位下）」、もう1枚に「此屏風後藤絃無老ニ有／元禄五年六月廿七日長五郎写」とある。土佐光成が土佐光信の作と紙中極をした作品が後藤絃無の元であり、元禄5年（1692）に長五郎が模写したものとわかる。細密というわけではないが、要所を押さえた略筆によって画面を手早く写し取っている。長五郎が何者かは不明。光成が左近衛将監となるのは延宝9年（1681）で、元禄5年は存命中であることを考えると、土佐光成が紙中極をした際、模写が行われたと考えることもできる。

光成が光信の作として鑑定したところから、原本にはそれなりの古格があったと思われるが、画面の端には切られた図様が見られ、この2扇で完結していたのかはわからない。というのも、1枚には「薬師寺最勝會／正月七日」「灌佛 四月八日」「祈年二月四日」、もう1枚には「開白賀詣四月／中之西日」「最勝王経五月廿五日」「日吉祭 四月中／申日」と小札の存在が記されており、本来は祭礼法会などの宗教行事を集めた月次屏風の一部であった可能性があるためである。仮に、この図が六曲屏風などの一部であったとしても、紙中極の位置から、すでに本来の姿を失い2扇の状態になっていた可能性があるだろう。ただ、端裏に「山王祭之図」と書かれているため、原屏風のこの2扇に描かれた山王祭の部分が興味の対象となったのは間違いない。

山王祭は滋賀県大津市の日吉大社で4月の午、未、申、酉の日に行われる祭礼として知られ、延暦10年（751）に起源を持つとされる。特に西本宮の祭神大己貴神の勧請を表す申の神事は祭礼の中心となっており、本粉本もこの神事の一部である唐崎の御旅所へ山王七社の神幸する場面が描かれる。近年土佐光茂周辺の作とされつつあるサントリー美術館本《祇園・日吉山王祭礼図》<sup>5</sup>との図像上の共通点は見いだせない。

#### E 《競馬図屏風模本》

競馬図粉本として一括される粉本のひとつ。「元禄八年／乙亥十月十日遣／久保常介老取次難波や素順老所持／九郎左衛門頼ノ由／時代能見事ナルフルビノ屏風也」とあり、元禄8年（1695）の鑑定の依頼に際して模写したものとわかる。紙中極も書き留めており「正五位下形部大輔藤原光茂恭直筆。土佐左近将監光成（印形）」と光成によって光茂の作としている。原本屏風の形状は記録されていないが、図像としては春日大社の所蔵する《競馬図》<sup>6</sup>の左隻に近似している。画面構成からも本来は右隻があったと考えるべきだろう。ただ春日大社本とは明らかに異なる作品であることは、本図では画中にしだれ桜を描くことからわかる。春日大社本が室町時代



図3 競馬図屏風模本

末期 16 世紀後半の土佐派の作と考えられていることは、この模本の原本を光茂の筆と見る光成の見解につながっており、近世の土佐家がやみくもに中世土佐派の作を光信に帰するものではないことを教えている。享保 10 年（1725）の光芳による所蔵粉本目録には惟久、光信、光吉の図に加え、300 年余前、200 年余前の競馬図粉本の所蔵を伝えており、その一部は徳川吉宗の上覧を受けている<sup>7</sup>。

## F 《承安五節図屏風模本》

《承安五節図》は承安元年（1171）に行われた五節の様子を描いたものとして知られる。五節とは、新嘗祭や大嘗祭の最後に行われる豊明節会と呼ぶ宴において、四人または五人の舞姫によって舞われる五節の舞を中心とする行事である。原本は失われており、東京国立博物館や三の丸尚蔵館が所蔵する模本などによってその図様が伝えられている。原本の制作時期は不明確だが、描かれる人物の似絵の手法から考えて承安元年からさほど離れた時代とは考えられていない<sup>8</sup>。『看聞御記』永享 3 年（1431）の記事によれば、その頃 3 巻の卷子として摂政家に存在していたことがわかるので<sup>9</sup>、大切にされていたことがわかる。時代は下り『考古画譜』の考証では応仁年間のこととして、土佐広周が雲や松を補筆して絵巻を屏風に改めたとし、禁裡にあったこの屏風を元和 6 年（1620）に住吉如慶が模写したとする<sup>10</sup>。後にこの粉本から再び絵巻に写されたのが現存する流布本らしい。土佐家の粉本には一切墨書がなく、この粉本が広周屏風から写したものか、如慶模本から写したものか不明であるが、絵巻の形で流布することが多い《承安五節図》が屏風形式の模本として伝わるのが貴重である。宝暦 3 年（1753）に豊明節会五節が再興された際、光淳が家伝の古図を提示したとする事跡<sup>11</sup>に関わるものであろうか。光芳による所蔵粉本目録の「一 五節 同人（光信）」に該当する可能性がある。

現存する卷子 1 巻が屏風一双分とすると、この粉本は右隻にあたるのであろう。全部で 9 段あるうち、第 1 段、第 2 段の前半が上段に、第 4 段、第 5 段、第 6 段が下段に配置されており、失われた左隻には第 2 段の後半と第 3 段が上段に、第 7 段、第 8 段、第 9 段が下段に配される形式であったと思われる。原本の持つ似絵としての肖似性はこの模本においても比較的よく遺されており、手本となった絵画または粉本が質の高いものであったことを教えてくれる。右下に朱文方印「画院待詔」がある。



図 4 承安五節図屏風模本

## G 《年中行事図屏風模本》

宮廷行事を描く屏風の粉本としては、田中家が所蔵する《年中行事絵巻》第 5 巻内宴<sup>12</sup>を屏風に仕立てたものがある。内宴は 9 世紀から内裏で行われた私宴で、1 月の下旬に開催されたが、平安時代末期には途絶え、再興しなかった。これは 1 扇ずつ白描により模写されたまくりの粉本で、「三」を欠くものの「一」から「六」までの端書きがあり、六曲屏風一隻分の粉本のうち 5 枚が遺る。描かれるのは原本の第 1 段と第 3 段だが、上段に第 3 段と第 1 段の後半、下段に第 1 弾の前半を配置しているので、配置は原本卷子に従うものではない。画面の構成から考えて本来は第 2 段、第 4 段、第 5 段が描かれるもう一隻の屏風が存在し、六曲一双屏風として完結していたと考えられる。従って、内容と端書きの数字からこの一群の粉本は右隻を構成する部分と考えてよい。現存する田中家本と比較すると、土佐家模本では人物の面貌が全体に面長に描かれており、直接の模写関係は考えにくい。卷子本

から何者かが屏風に再構成したものを写した可能性が高いと考える。

## H 《御即位行幸図屏風模本》

宮内庁が所蔵する《御即位行幸図屏風》<sup>13</sup>の模本。左隻の3・4・6扇部分のみが遺る。「拾貳枚之内」とあるので当初は六曲一双屏風全図を写していたものらしい。色指示が部分的に書き込まれるが、残存部分に墨書は少なく、模写の経緯を伝える記述は確認できない。白描による描写はかなり粗略に見えるが、模本としての要所は押さえられている。原本は寛永7年（1630）の明正天皇の即位と同年の御水尾院・東福門院の仙洞への御幸を描いたもので、作者は不明。人名など書き入れがあるアメリカのネルソン・ギャラリーに所蔵される同系統の図が、宮内庁本に先行すると考えられている<sup>14</sup>。粉本として遺る左隻は御水尾院・東福門院の御幸を描く図であり、17世紀の盛儀を描くものとして人気があったらしく『隔冥記』には正保2年（1645）伊藤長兵衛に制作させた例が記される<sup>15</sup>。

## I 《大坂冬の陣図屏風抄写》

大坂冬の陣図屏風粉本は東京国立博物館に模本が遺る《大坂冬の陣図屏風》<sup>16</sup>の部分抄出模本。卷子状の粉本2図に写される。1枚は左隻第1扇から第2扇の最下部が写され、もう1枚は同じく左隻第1扇から第4扇にかけて、下段の中程を連続して写している。色指示の状況から東博模本からの複製もしくは共通の祖本からの模写と考えられるが、土佐派の絵師が描いたものかは不明である。

## 3. 名所絵の下絵

四季の移り変わりを事物風俗によって描く景物画は屏風にとっても重要な主題である。歌枕の絵画化と深く関わりを持つ名所絵は、独自の展開を見せて景物画の一部をなした<sup>17</sup>。室町時代末期から江戸時代前期にかけて、装飾性に富む屏風絵として幾多の名所絵が遺されるようになり、近世土佐家においても名所絵への接近が課題とされた。中世の光信が京中図屏風を描いたことはすでに歴史の向こうにある記憶にすぎなかったと思われるが、都の景観を描く洛中洛外図もまた土佐家の家業に関わる画題と認識されていたようである。そしてこうした景観描写において実感を伴う真景図の表現が意識されるようになるのも時代の趨勢であった。土佐光起の著とされる『本朝画法大伝』には「たとへば山水の景地も悉其地に不<sub>レ</sub>跋して描」を「誤」の例として批判している<sup>18</sup>。真景に基づく正確な情報によって絵を描くことの必然を説くのである。

## J 《厳島図屏風下絵》

広島県廿日市市にある厳島神社は宗像三神（田心姫神、湍津姫神、市杵島姫神）を祀る式内社。平安時代にはすでに厳島側の内宮（現厳島神社）と本土側の外宮（現地御前神社）によって構成された。

粉本は16枚あり、図様と形式から八曲一双屏風の粉本とわかる。左隻粉本に記された墨書「延寶五年巳三月下旬。松平相模守様御八枚折。」から、この八曲一双屏風が因幡国鳥取藩主池田光仲（1630-1693）へ延寶5年（1677）に送られたものとわかる。注文が光仲自身からなされたもの

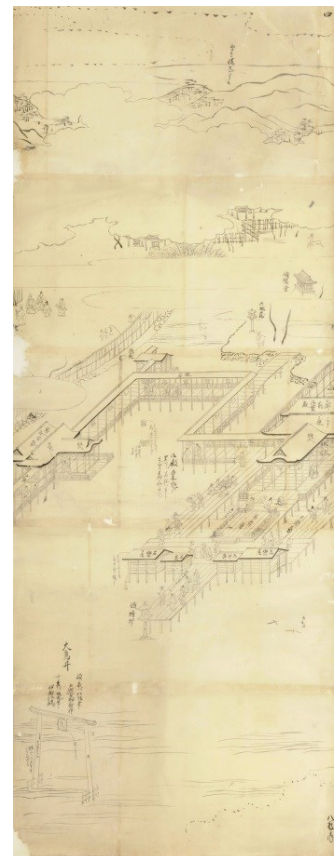


図5 厳島図屏風下絵

か、何者かの依頼により光仲に送られたものかはわからない。光起 61 歳、その子光成（1646-1710）31 歳の年である。光起が光成に絵所預職を譲り落飾するのが延宝 9 年（1681）年であることを考えると、幕府親藩への重要な仕事は当然光起の指導のもとで行われたと見なければならない。

白描で描かれ、色指示にあたるものはほとんど見られない。右隻は巖島北部の巖島神社内宮を中心とし、信仰の山弥山を含んで南は大元浦から北は小浦までを描く。左隻には巖島北端の長浜から杉之浦までと、大野瀬戸を隔てた本土側の地御前とよばれる地域から、巖島神社外宮（現在の地御前神社）とやや離れた平良の地に鎮座する速田神社（現在の速谷神社）を描く。従って図は巖島北部から海を隔てた地御前までを連続して描く大構図を見せている。全体として下絵の特徴を示し、貼紙による修正を加えた部分も遺るが、最終的な草稿とみてよい。

内宮を描く右隻には「上之屏風」「春」とあり、外宮を描く左隻には「下之屏風 地之御前」「秋ノコミ也紅葉有」とあれば、左右を対比させた上で季節を描き分け、景物画の視点を保持している。

右左隻とも各堂舎名や地名を書き入れているが、右隻では絵画の制作に直接関係のない事項がかなり多く書き込まれている。例えば、内宮本地堂近くに記される「元禄二年三月十五日、本社斗ハ百四五十年已前建ナル。ツエト云人コモリテ切腹ノ時火ヲカケ、本社ハヤクル。残ハ入道相国清盛被建候ノ也。」という墨書を見ると、歴史的知識が書き込まれ、絵師が制作にあたりどのような興味を持っていたのかを示して興味深い<sup>19</sup>。この右隻粉本は徳川美術館所蔵の土佐光起作とされる《松島・巖島図屏風》<sup>20</sup>の右隻《巖島図》と近似しており、粉本流用の可能性が高い。左隻との墨書の内容の違いも、右隻のみが再制作された制作状況の違いがあったものと考えられ、延宝 5 年に描かれた粉本に元禄 2 年（1689）に手が加えられたことが推測される。

## K 《松島図・塩竈図屏風模本、松島図屏風下絵》

宮城県にある松島は近世初期に景勝地として日本三景のひとつにあげられた。また、隣接する塩竈の浦は歌枕として古くから都の歌人に知られた地である。この松島・塩竈の浦を描く屏風粉本が六曲屏風 3 隻分 18 枚遺る。これは形状形式から二つのグループに分けられる。

ひとつは松島図と塩竈図が六曲屏風一双分として遺るもので、淡彩ながらかなり丁寧に彩色が施されている。墨書は社寺名地名などを書き入れるほか、注記の添えられる部分がある。原本および模写者に関する記事はない。表具の縁の位置を線で示すところから最終的な清書もしくは模写された手控え用の粉本と思われる。

今ひとつは白描を主とする松島図のみが六曲屏風 1 隻分として遺るものである。図様としては、徳川美術館所蔵の土佐光起作《松島・巖島図屏風》<sup>21</sup>の左隻《松島図》と完全に一致する。また、白描の一部に著彩が加えられているが、これも徳川美術館本と同じ彩色構成を見せることから、両者は下絵と本画の関係にあると考えられる。

一隻屏風は、一双屏風松島図に比較すると各構成要素に接近して拡大ぎみに描かれている。そのため一双屏風の大観的な描写に比べて、一隻屏風は諸要素の密度が増し表現力が加わっている。徳川美術館本の制作時期を巖島図の粉本から光起晩年の元禄期と見るならば、一隻屏風下絵の制作時期もこれと同じでなければならない。徳川美術館本の制作に際し、巖島図と松島図が組み合わせられることになり、家蔵の松島・塩竈図屏風の松島図に取材し、すでに下絵のある巖島図と表現



図 6 塩竈図屏風模本

のバランスをとるために、新たに松島図の下絵を書き起こしたと考えられる。

従って作者不明の松島・塩竈図の制作は徳川美術館本に先行するものであるとともに、その原本は17世紀の松島・塩竈図のひとつに加えることができる。仙台市美術館、福岡市美術館、東北歴史博物館などに所蔵される17世紀の塩竈・松島図一雙屏風の多くは海上のかなり高いところから急角度で俯瞰する構図であり、画面に水平線は入らない<sup>22</sup>。加えてこれらの空間処理も金雲と砂子によって装飾的に描かれることを考えると、一雙屏風粉本が、水平線を低く下げて画中に納め、霞による空間処理によって真景図に近づけていることは注目してよい。この図様が土佐家によって構想されたものかは不明であるが、延宝年間に土佐家で制作された巖島図に共通する構図感覚が表れている点は指摘できる。当時まださほど多くない真景図的名所図の作例ということは可能だろう。加えて、他の17世紀の塩竈・松島図屏風では中心的主題として大きく描かれる瑞巖寺や塩竈明神が一雙屏風粉本では極めて小さく扱われる特徴があり、一雙屏風粉本の原本には、先行する松島・塩竈図の作例と大きく異なる制作動機が働いていた可能性がある。一雙屏風の塩竈図松島図とも6扇目に幕末明治期の絵師土佐光武の壺印がある。整理のための所蔵印と見られる。

## L 《吉野山図屏風下絵》

古くから歌枕として親しまれた奈良県の吉野山は、様々な機会に描かれてきた。粉本として吉野山図屏風の5扇分が遺る。「拾貳枚のうち」とあるので、六曲一雙屏風であったと思われるがその右隻2扇から5扇目が現存部分である。一雙で吉野図なのか、各隻で画題が異なるかはわからない。尾根伝いに広がる山上の堂舎を中心とし、左上に吉野川の流れを描く。参道を経て仁王門と蔵王堂そして少し離れて吉水神社の姿が見える。金雲と砂子で空間処理され、17世紀後半のものかと思われる。

この屏風がどのような経緯で描かれることになったかは記録がなくわからないが、延宝7年(1679)に土佐家が奈良、飛鳥、吉野、高野山を旅行した記録である『大和旅行記』が遺っており<sup>23</sup>、3月21日に吉野に宿泊している。京都を17日に立ち、21日は多武峰から吉野までの道のり。吉野山麓の幣掛神社近くで宿泊。翌22日は銅鳥居からはじまり、仁王門、蔵王道、吉水神社、勝手神社、竹林院、如意輪寺、花矢倉、水分神社、金峯神社、西行庵と奥院まで吉野山上を観光すると山を下り東熊野街道に出て宮滝周辺で滝飛などに興じた後、上市で宿泊、その後24日に高野山にのぼっている。旅の参加者は記されていない。この時光起は63歳、光成は34歳である。光成はまず間違いなく参加したであろうし、光起とても高齢とはいいながら、絵所預として家の中心的な存在である。参加の可能性はあるだろう。この旅の記録にはわずかに旅先の風景を写生した、いわゆる真景図が付される。それは今日の風景写生と何ら変わるところがないところから、17世紀後期の土佐家の風景描写において、こうした現実に目にした景観の記憶が表現の基盤に置かれたとしても不思議ではない。

吉野山図粉本には、描写される事物に実感があり、この旅の後に描かれたものと見るべきと考える。描画の特徴から作者としては光成を想定すべきであろう。

## M 《洛中洛外図屏風下絵》

画中の墨書からすると、元禄2年(1689)に美作津山藩主森長成(1671



図7 洛中洛外図屏風下絵



ー1697) に献上された洛中洛外図屏風の下絵粉本である。原本は六曲一双屏風であつたらしく、粉本6枚に「西一」から「西六」の端書が見られる。「西一」から「西六」の順に一枚ごと7月から12月までの月名が割り当てられており、一双屏風の右隻から左隻に向かって一扇を単位とした月次絵となっていたことがわかる。左隻にあたる本図の画面構成は前景、中景、後景、遠山と四段階に水平の帯状にわかれ、地平線は下げられて、画面の五分の一あたりに置かれる。前景から後景にかけて遠近法による段階的な景物の縮小化が見られ、金雲による装飾的な空間が破綻する構図の辻褄をあわせることに利用されるものの全体として自然な俯瞰図に近づける配慮がある。江戸時代に活発に制作された洛中洛外図は時代の下るに従って真景図に接近する過程を見せるが<sup>24</sup>、本作もその流れの中にある。

月次絵の主題となる風俗は前景に描かれており、職人たちの営みを中心とする。多数の人物の描き込みが見られるが、武士の姿は少なく女性と子供の姿が多い。「西一」粉本の端書きに「人数貳百卅人」とあるのはどこまでを数えたのか不明。町屋の省略は当然見られるが、町の境界におかれた木戸門はかなり丁寧に描き込まれる。風俗行事として盂蘭盆会、貴船狭小神輿、玄猪、お火焚、せきぞろなどを見ることができる。中景から遠景にかけては洛中洛外の景勝地が描かれ、遠山が背景として描かれる。名所を指示する墨書として「天龍寺」「法輪寺」、「御室」、「平野」があるが注記を欠くものが多く、他の作例により推測するほかないため、描かれる範囲はにわかに定め難い。画面の中央右よりに二条城が置かれているが、名所地の配置には合理性を欠く部分がある。月次屏風としての景物表現を優先したものと思われ、古様な表現を継承する立場である。元禄2年は光起在世中だが、画中には土佐光成の款記が見える。光起の関与が皆無とは考えにくいと、光起監修のもと光成が制作したか、右左隻を光起と光成で分担した可能性が考えられよう。

#### 4. 絵所御用

近世土佐家の家業の基盤となったのは宮廷絵所としての用務であった。光起、光成の時代はまだその動向は明確ではないが、元文3年(1738)の大嘗祭に関わった光芳以後、宮廷からの絵事御用が安定したと思われる。宮廷、公家や武家からの依頼により、諸種の屏風制作に関わるようになったと思われ、遺された下絵からその痕跡をうかがうことができる。特に寛政度内裏造営以後、復古様式を採用した特殊な形式の屏風に見識を見せるようになる。

#### N 《歌絵押絵貼屏風下絵》

概ね縦76cm、幅41cmの大きさの粉本。画面の一部に図様に対応した和歌が書き込まれているので、歌絵とわかる。端書きに数字が書き込まれ、七の傍らに「片ノ始」とあるところから六曲一双押絵貼屏風の粉本と考えられる。遺されているのは右隻にあたる1、2、4、5、6扇目と、左隻にあたる7、8、9、10扇目の9枚。焼筆によるあたりや胡粉による塗りつぶしが見られ、修正の指示の遺るところから下絵として制作されたものとわかる。採録された歌人と歌は次のとおり。歌人には重複する者があり、また採録された歌集にもばらつきがある。款記はないが描写から見て光成によるものであろう。



図8 歌絵押絵貼屏風下絵

- 1 式子内親王  
山深み春とも知らぬ松の戸にたえだえかかる雪の玉水 (新古今和歌集)
- 2 藤原公経  
高瀬さすむつだの淀の柳原みどりもふかく霞む春かな (新古今和歌集)
- 4 在原業平  
ぬき乱る人こそあるらし白玉のまなくも散るか袖のせばきに (古今和歌集)
- 5 藤原家隆 (従二位)  
早苗とるたこのうら人夏かけてなはしろ水に入江せくらし (建保名所百首)
- 6 藤原定家  
夕立の雲間の日かげ晴れそめて山のこなたを渡る白鷺 (玉葉和歌集)
- 7 順徳院  
さらしなやよわたる月のさと人もなくさめかねて衣うつなり (続古今集)
- 8 源通光  
明けぬとて野べより山に入る鹿のあと吹きおくる萩の下風 (新古今集)
- 9 藤原俊成  
山人の折る袖にほふ菊の露うちはらふにも千代は経ぬべし (新古今集)
- 10 藤原俊成  
難波人あし火たく屋に宿かりてすずろに袖のしほたるかな (新古今集)

## 0 《関東御用名所図屏風下絵》

関東御用名所図屏風は、幕府からの依頼で調製することとなった六曲一双屏風のための小下絵。巻首に「御屏風一双／片光芳／片廣守」右一双共此彩色入之草稿へ相認関東え差上上覽御治定依而片分草案廣守え被下調進故此方二片斗残」土佐大蔵少輔光芳／住吉内記廣守」とあることからわかる。土佐光芳が四季と雑を主題に合計 47 図の名所絵を描き、上覧のうえ決定された草稿とされるが、1 隻分は幕府の御用をうける住吉家の廣守 (1705-1777) が制作することになる。光芳と徳川吉宗を将軍とする幕府との接近は享保 10 年 (1725) の土佐家粉本の将軍閲覧などを通してうかがわれ<sup>25</sup>、こうした屏風御用を受けることになったのも、両者の関係の強化を印象づける。住吉廣守が幕府の御用絵師となるのが享保 19 年 (1734) であり、端書きに光芳は大蔵少輔とあるので元文 4 年 (1739) に弾正少忠となる以前となることから、屏風制作はこの間と思われる。光芳の墨書には 1 隻を廣守に獲られた悔しさが見える。朱文方印「土佐之印」と朱文重郭六角印「画院」がある。

47 箇所の名所図は歌枕となる場所が撰ばれており、後に寛政度内裏造営で名所図を描く以前の土佐家の名所図の認識を知ることができる。ここに描かれる名所図は四季にちなむものとして描かれ、いわゆる景物画と認識されるが、光起、光成の時代に見られた真景図への接近はなく、観念的かつ象徴的な図で終始している。このあたりは、11 歳にして父光祐と祖父光成を失った光芳と光起以来の画業の断絶を感じさせる。制作物そのものは装飾的な実用調度調製に止

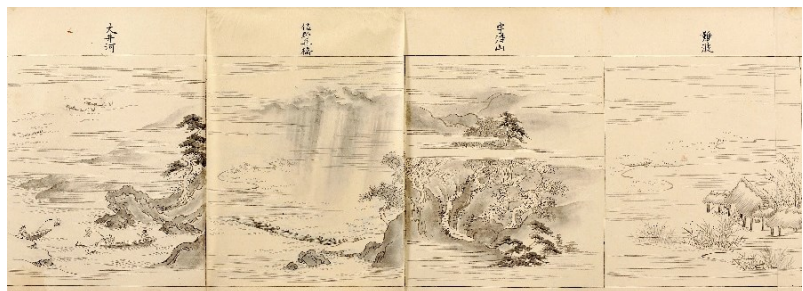


図 9 関東御用名所図屏風下絵

まるものといえよう。下絵を大きく描き直しをしているものは12図ある。

描かれた名所は次のとおり。下線は大きく書き直した図であり、これが撰ばれた画題かもしれない。春（高砂、若松原、春日、武蔵野、塩竈浦、濱名橋、玉津嶋、三輪、逝廻岡、芳野、鈴鹿、多枯浦）。夏（筑波、二見浦、難波、宇津山、佐野舟橋、大井河、青葉山、布引瀧）。秋（泊瀬、野路玉河、宮城野、淨見關、須磨、明石、更級、真野入江、伏見、生田森、吹上濱、龍田）。冬（住吉、小塩山、志賀、鳴海、宇治、交野、白川關、松嶋）。雑（不盡山、松浦、隅田川、佐夜中山、海橋立、鳥羽、會坂關、若浦）

## P 《御即位新調道具屏風下絵》

「寶曆十三年／御即位新調御道具御屏風下画」光芳／光淳／光貞」と記された包紙に入れられた6枚の淡彩粉本。うち2枚は耕作図を画題としており縦横比から2曲屏風の粉本と思われる。残る4枚は同大で宮中の諸行事から絵合（4月）、端午（5月）、乞巧奠（7月）、衣配（12月）を描く。縦横の比率から六曲屏風の粉本と思われるが、依拠する手本は不明である。文字の書き入れはなく、砂子と泥引きの部分に黄色く塗るほか、屋根、樹叢、水にも淡彩を施す。伺下絵の形式といってよい。年紀から宝暦12年（1762）に踐祚、翌年即位した後桜町天皇のために調製された屏風ということになる。包紙には光芳（1700-1772）の名があるが、彼は延享3年（1746）に落飾して常覚と称している。本来ならば従五位下の光淳（1734-1764）と従六位上の光貞（1738-1806）の二人が絵所として制作するべきところだが、光芳は落飾後復歸して元のごとく勤めたという説もあり<sup>26</sup>、特殊な事情があったものと思われる。光芳は元文3年（1738）の大嘗祭に関わり宮廷画家としての地位を確立した絵師である。



図10 御即位新調道具屏風下画

## Q 《大宋屏風下絵》

大宋屏風は、太宗屏風とも呼ばれ、各扇に毬杖を持った騎馬の唐人を描く六曲一双の屏風である。その名称の揺らぎとともに、屏風の起源も諸説ある。比較的支持されるのは唐の太宗に由来する名称と考え、制作の起源を平安時代に置くものである<sup>27</sup>。絵巻などの画中画や文献からその制作が宮中で断続的に続けられていることがわかるが、本粉本はその江戸中期の記録と見なすことができる。表紙に「大宋御屏風畫／畫院藏」とあり、巻尾に「安永三年午年九月今度／内侍所御修復ニ付御遷宮後從禁中被進大宋御屏風一雙仕立例之通り行事官調進押畫十二枚古圖ヲ以被相頼初テ認左傳 奏衆ヨリ御内意ニ而被相頼候趣也」△印之分十二枚認也／左近将監光貞」と奥書がある。安永3年（1774）9月に内侍所修復の際、土佐光貞が行事官より《大宋屏風》調進を命ぜられたことがわかる。古図により描いたとする下絵だが、その典拠は明らかにしていない<sup>28</sup>。本図の場合唐人の大半は弓矢を所持しており、韃靼人狩獵図のようなものから採集した図像の可能性もある。光貞は分家初代にあたるが、父光芳はすでに亡く、本家光時は幼かった。光貞より19図が行事官に提示され、うち12図が選択されている。選定には伝奏が関わっているので天皇周辺の意向が反映されたい。

## R 《銭形屏風下絵》

銭形屏風は古い屏風の形式であるが、寛政度内裏造営に際し古式を復元したものが作られた。これは軟錦の復元などの成果を受けたものである。

2種類の草案が遺されている。ひとつは「禁中銭形御屏風草案控／絵山水」土佐土佐守」と書かれた包紙に続き「六枚折上仕立／銭形山水御屏風三雙之下絵／一帖初春中春／二帖暮春初夏／三帖中夏晩夏／四帖初秋中秋／五帖暮秋初冬／六帖中冬歳暮／土佐土佐守／土佐左近将監／土佐虎若丸」と書かれた包紙にくるまれた紙本淡彩の小下絵、いまひとつは「洞中銭形御屏風草案控／絵山水」土佐土佐守」と書かれた包紙にくるまれた紙本淡彩の小下絵である。土佐守以下の絵師の名は寛政度内裏造営の絵事御用に関わった光貞、光時、光孚の3名である。このとき光貞は正五位下、光時は従五位下、光孚は無位で分家の光貞が最も高位にあった。光孚はこの屏風制作の直後叙任を受けることになる。

前者は六枚折屏風6帖の組み物となっており、各帖には初春から歳暮まで四季が12月として割り当てられている。各扇は軟錦で仕切られているものの図様は各帖の中で連続しており、概ね一月分に3扇をあてる。各帖には特に色紙形を置く場所を指示せず、歌絵や名所絵としての性格は見えない。景物は和様であり、特に庶民の暮らしを描く画題を選んでいる。一方後者は六枚折屏風4帖の組み物となっている。各帖には春帖から冬帖まで四季が割り当てられており、各扇は軟錦が周囲に廻らされ、仕切られているものの図様は全体として連続している。各帖に3枚の色紙形があてられ漢詩が記されていた。描かれる景物は極めて穏やかだが中国の風景を画題としているところから公的な場の調度として考案されたものと思われる。

寛政度内裏造営以後の内裏関係絵事御用の中身を書き留めた『諸御殿御造営御修復御用年号書抜』<sup>29</sup>によれば、寛政2年(1790)9月に《四季本文之意四尺銭形屏風》二双の制作が命じられており、11月に納入されている。これは内裏用なのか仙洞用なのかは記していないが、粉本はこの時の制作に関わるものであろう。仙洞用とした小下絵が実際に制作されたものと思われ、一部は現在も御物として遺る<sup>30</sup>。ちなみに、この時、光貞に協力して内裏造営御用に関わった鶴沢探索(1729-1797)にも山水五尺銭形屏風が発注されているため、制作された銭形屏風は全部で三双すなわち6帖ということになる。



図11 銭形屏風下絵

## S 《松鷹竹鶴図屏風下絵》

松鷹図と竹鶴図の原寸大下絵がある。焼筆のあたりと朱筆や胡粉による修正、貼紙が見られ、典型的な下絵粉本の状態を示す。制作に関わる書き込みがないため、作者が不明に見えるが、淡彩の小下絵が遺されており、この図が土佐光貞によって描かれたものであることがわかる。右隻の松鷹図と左隻の竹鶴図の一双屏風として制作されたが、本画を制作する際、小下絵から構図に変更が加えられており、小下絵に対して注文者からの指示があったものと思われる。また、この小下絵には、別に制作された金地著彩四季絵六曲一双屏風の小下絵が付されおり、18世紀末頃の土佐家における四季絵屏風の類型を見ることができる。

## T 《栄花物語図屏風下絵》

栄花物語の首巻にあたる「月の宴」に画題を得た粉本。康保3年（966）8月に村上天皇が催した月の宴の場面で、天皇御前で絵所別当済時と作物所別当為光が前裁合わせを行うところ。東京国立博物館が所蔵する土佐光祐（1675-1710）《栄花物語図屏風》の図様の中に本図とほぼ同じ場面が見られる。この粉本には明確に屏風のものとする記述はないが、構図は東京国立博物館本を縮小したものであり、金雲を用いた画面構成は屏風のものと考えて問題ない。ただし、構図は上下に圧縮されており、小屏風の粉本と思われる。《土佐派絵画資料》の中にはこの他にも栄花物語に関わる粉本<sup>31</sup>があり、当時は比較的需要のある主題であったことがわかる。

## U 《飛香舎銭形屏風下絵》

「安政三卯年調進／行事官調進／飛香銭形御屏風一帖 光清奉／古今集和歌之意」と端書きにある。飛香舎は御所後宮の殿舎のひとつで、古くは清凉殿の北西に位置していたが、寛政度内裏造営の際、皇后宮常御殿などとともに御所北部の朔平門近くに裏松固禪の考証による復古の様式で造営された。竣工は内裏造営よりやや遅れた寛政6年（1794）で、このとき光貞・光時によって襖絵が制作された。嘉永7年（1854）の京都大火では焼失を免れたため、安政度内裏造営の際光清（1805-1862）・光文（1813-1879）によって補修され現在も遺る

<sup>32</sup>。本作は、この安政2年（1854）の内裏造営に引き続き行われた飛香舎の補修にともない調製されたと思われる六枚折銭形屏風1帖の下絵である。小下絵1枚と大下絵6枚が揃っており、各扇に異なる絵が入るが霞のみは1帖の中で連続性を見せている。光清は光貞を祖とする近世土佐分家方の絵師。安政3年（1856）時では従四位下にあつて土佐本家の光文より高位に叙されていた。そのため光清が命ぜられたのである。胡粉や貼紙による修正、朱筆によるあたりや修正が見られ、大下絵そのものであることがわかる。画題は古今和歌集からとるとするが、依拠する歌そのものは画中に記録していない。

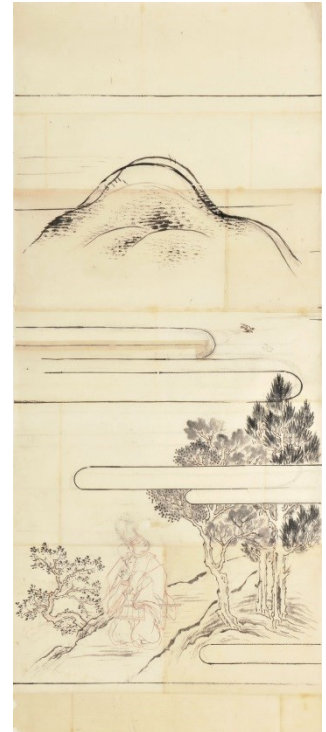


図12 飛香舎銭形屏風下絵

## 5. おわりに

《土佐派絵画資料》の中に見られる屏風関係粉本を見ると、まず江戸初期の土佐光則の模本が確認され、下絵としてはその子光起の時代のものを見いだすことができる。以後累代土佐家絵師の画業の記録を見れば、宮廷調度として古くから調製された屏風に対して、必要十分な興味を持っていたことは想像に難くない。特に17世紀の光起、光成の時代に制作された名所絵においては、自然な景観描写への接近を見せる独自の展開があり興味深い。

光起の死後、その画業を継承した子の光成、孫光祐が相次いで亡くなる。そのため光祐の子光芳が11歳で家業の継承を余儀なくされ、その表現には大きな断層が生まれることになる。光芳以後の類型に従った象徴的な大和絵表現が、光起時代の実感を反映した感覚とは異なる展開を見せる理由である。それはやがて寛政度内裏造営における復古様式の模索の中で、光芳の子光貞に受け継がれ、古典的で穏健な様式を作り出している。

ここに紹介した屏風絵粉本の展開を見れば、近世土佐家の画業の変化を反映していることがわかる。それは中世の土佐派が肖像、絵巻とともに深く関わった障屏画の世界に、近世の土佐家もまた家業の

要所を感じ取っていた証しである。屏風絵粉本は彼らの絵画表現の特徴を端的に表しており、家業と絵画形式の関わりを物語る資料として価値がある。

## 【注】

- 1 『「BIOMBO 屏風 日本の美」展図録』（日本経済新聞社、2007年9月）。『日本屏風絵集成 第1巻 屏風絵の成立と展開』（講談社、1981年7月）。
- 2 拙稿「近世土佐派記録（一）」（『京都市立芸術大学芸術資料館年報 第3号』京都市立芸術大学芸術資料館、1993年8月）。
- 3 宮島新一「明石・浮舟図屏風」（『国華』第1200号、1995年11月）。
- 4 『「描かれた東海道」展図録』（静岡県立美術館、2001年10月）。
- 5 榊原悟「日吉山王・祇園祭礼図屏風」（『国華』第1202号、1996年1月）。亀井若菜『表象としての美術、言説としての美術史：室町將軍足利義晴と土佐光茂の絵画』（ブリュッケ、2003年12月）。
- 6 泉万里「春日大社蔵：競馬図屏風をめぐる」（『待兼山論叢.美学篇.25』1991年）。
- 7 拙稿「近世土佐派記録（一）」（『京都市立芸術大学芸術資料館年報 第3号』京都市立芸術大学芸術資料館、1993年8月）。
- 8 山本陽子『「承安五節絵」の似絵性について－住吉内記系の模本による』（『跡見学園女子大学紀要 第35号』2002年3月）。
- 9 『続群書類従 補遺三』12月18日の条（1930年5月、p.623）。
- 10 「新訂増補考古画譜 卷六」（『黒川真頼全集 第一 上』国書刊行会、1910年3月、pp.214f）。
- 11 正宗敦夫『地下家伝 中』第20巻（自治日報社、1968年12月、p.1086）
- 12 小松茂美『年中行事絵巻』（中央公論社、1977年12月）。
- 13 『皇室の名宝-日本美の華 二期：正倉院宝物と書・絵巻の名品』展図録（NHKほか、2009年10月）。『日本屏風絵集成 第12巻 公武風俗』（講談社、1980年7月）。
- 14 『日本屏風絵集成 第12巻 公武風俗』（講談社、1980年7月）。
- 15 『隔冥記 第1巻』3月9日の条。（思文閣出版、1997年3月、p.682）。
- 16 『日本屏風絵集成 第12巻 公武風俗』（講談社、1980年7月）。
- 17 武田恒夫『日本絵画と歳時 景物画史論』（ぺりかん社、1990年4月）。
- 18 坂崎坦『日本絵画論大系』第5巻（名著普及会、1980年1月）p.54。
- 19 拙稿「土佐家の厳島図」『京都美術 48号』（2017年3月）。
- 20 『日本屏風絵集成 第10巻 名所景物』（講談社、1980年3月）。
- 21 前掲注20書。
- 22 『「松島・天橋立・厳島 日本三景展」図録』（日本三景展実行委員会、2005年8月）。
- 23 拙稿「近世土佐派記録（三）」（『京都市立芸術大学芸術資料館年報 第5号』京都市立芸術大学芸術資料館、1995年8月）。
- 24 『「京を描く-洛中洛外図の時代」展図録』（京都府京都文化博物館、2015年3月）。辻惟雄『洛中洛外図』（至文堂、1976年6月）。
- 25 拙稿「近世土佐派記録（一）」（『京都市立芸術大学芸術資料館年報 第3号』京都市立芸術大学芸術資料館、1993年8月）。
- 26 前掲注11書。
- 27 金子岳史「大宋屏風と馬形障子」（『待兼山論叢第40号美学篇』（2006年12月））。
- 28 土佐光起に韃靼人狩獵図を描く《狩獵図巻》があるが、図像上の共通点は見いだせない。
- 29 拙稿「近世土佐派記録（四）」（『京都市立芸術大学芸術資料館年報 第6号』京都市立芸術大学芸術資料館、1996年8月）。
- 30 『皇室の至宝 御物 障屏・調度Ⅱ』（毎日新聞社、1992年3月）。
- 31 土佐光芳《栄花物語絵巻》（130012290100）、《栄花物語絵巻模本》（130012770100）。
- 32 『皇室の至宝 御物 障屏・調度Ⅲ』（毎日新聞社、1992年5月）。

表《土佐派絵画資料》における主要な屏風絵粉本

記号	名称	作者	技法	員数	法量(縦)cm	法量(横)cm	制作年	(西暦)	収蔵番号
A	源氏物語図屏風模本	土佐光則	墨画	1枚	149.7	61.7	江戸時代前期	17th century	130011920400
	源氏物語図屏風模本	土佐光則	墨画	1枚	152.6	62.5	江戸時代前期	17th century	130011920500
	源氏物語図屏風模本	土佐光則	墨画	1枚	131.3	62.4	江戸時代前期	17th century	130011920600
	源氏物語図屏風模本	土佐光則	墨画	1枚	148.1	61.2	江戸時代前期	17th century	130011920700
	源氏物語図屏風模本	土佐光則	墨画	1枚	158.2	60.6	江戸時代前期	17th century	130011920800
	源氏物語図屏風模本	土佐光則	墨画	1枚	157.5	59.0	江戸時代前期	17th century	130011920900
B	源氏物語図屏風模本	土佐家	墨画・部分膠彩	1巻	28.7	117.7	江戸時代前期	17th century	130012590100
	源氏物語図屏風模本	土佐家	墨画	1枚	27.9	40.7	江戸時代前期	17th century	130014381000
C	東海道図屏風模本	土佐光成	墨画・部分膠彩	1枚	65.4	48.6	元禄4年	1691	130011910100
	東海道図屏風模本	土佐光成	墨画・部分膠彩	1枚	55.6	49.1	元禄4年	1691	130011910200
	東海道図屏風模本	土佐光成	墨画・部分膠彩	1枚	55.1	48.9	元禄4年	1691	130011910300
	東海道図屏風模本	土佐光成	墨画・部分膠彩	1枚	55.4	48.8	元禄4年	1691	130011910400
	東海道図屏風模本	土佐光成	墨画・部分膠彩	1枚	55.4	48.6	元禄4年	1691	130011910500
	東海道図屏風模本	土佐光成	墨画・部分膠彩	1枚	55.6	49.2	元禄4年	1691	130011910600
	東海道図屏風模本	土佐光成	墨画・部分膠彩	1枚	54.2	48.5	元禄4年	1691	130011910700
	東海道図屏風模本	土佐光成	墨画・部分膠彩	1枚	55.5	48.8	元禄4年	1691	130011910800
	東海道図屏風模本	土佐光成	墨画・部分膠彩	1枚	55.7	50.0	元禄4年	1691	130011910900
	東海道図屏風模本	土佐光成	墨画・部分膠彩	1枚	55.6	48.5	元禄4年	1691	130011911000
	東海道図屏風模本	土佐光成	墨画・部分膠彩	1枚	55.6	48.6	元禄4年	1691	130011911100
	東海道図屏風模本	土佐光成	墨画・部分膠彩	1枚	55.7	48.7	元禄4年	1691	130011911200
D	祭礼法会図屏風模本	長五郎	墨画一部膠彩	1枚	161.6	94.3	元禄5年	1692	130010950100
	祭礼法会図屏風模本	長五郎	墨画一部膠彩	1枚	164.4	93.5	元禄5年	1692	130010950200
E	競馬図屏風模本	土佐光成	墨画	1枚	41.0	83.0	元禄8年	1695	130012011100
F	承安五節図屏風模本	土佐家	墨画	1枚	167.3	368.3	江戸時代中期	17th century	130011270100
G	年中行事図屏風模本	土佐家	墨画	1枚	179.8	62.2	江戸時代中期	17th century	130011130100
	年中行事図屏風模本	土佐家	墨画	1枚	183.2	63.3	江戸時代中期	17th century	130011130200
	年中行事図屏風模本	土佐家	墨画	1枚	181.7	63.1	江戸時代中期	17th century	130011130300
	年中行事図屏風模本	土佐家	墨画	1枚	180.3	62.2	江戸時代中期	17th century	130011130400
	年中行事図屏風模本	土佐家	墨画	1枚	180.3	62.7	江戸時代中期	17th century	130011130500
H	御即位行幸図屏風模本	土佐家	墨画	1枚	136.6	63.1	江戸時代中期	17th century	130011920100
	御即位行幸図屏風模本	土佐家	墨画	1枚	143.1	64.4	江戸時代中期	17th century	130011920200
	御即位行幸図屏風模本	土佐家	墨画	1枚	141.5	69.0	江戸時代中期	17th century	130011920300
I	大坂冬の陣図屏風抄写	作者不詳	墨画・部分膠彩	1巻	29.3	81.6	江戸時代中期	17th century	130012590200
	大坂冬の陣図屏風抄写	作者不詳	墨画・部分膠彩	1巻	29.4	255.4	江戸時代中期	17th century	130012590300
J	敵島図屏風下絵(上之屏風)	土佐家(光起)	墨画	1枚	128.0	44.0	延宝5年	1677	130010860100
	敵島図屏風下絵(上之屏風)	土佐家(光起)	墨画	1枚	127.7	48.0	延宝5年	1677	130010860200
	敵島図屏風下絵(上之屏風)	土佐家(光起)	墨画	1枚	125.2	47.6	延宝5年	1677	130010860300
	敵島図屏風下絵(上之屏風)	土佐家(光起)	墨画	1枚	124.8	47.6	延宝5年	1677	130010860400
	敵島図屏風下絵(上之屏風)	土佐家(光起)	墨画	1枚	115.2	48.5	延宝5年	1677	130010860500
	敵島図屏風下絵(上之屏風)	土佐家(光起)	墨画	1枚	124.6	48.5	延宝5年	1677	130010860600
	敵島図屏風下絵(上之屏風)	土佐家(光起)	墨画	1枚	132.2	47.7	延宝5年	1677	130010860700
	敵島図屏風下絵(上之屏風)	土佐家(光起)	墨画	1枚	129.2	47.8	延宝5年	1677	130010860800
	敵島図屏風下絵(下之屏風)	土佐家(光起)	墨画	1枚	128.6	43.3	延宝5年	1677	130010700100
	敵島図屏風下絵(下之屏風)	土佐家(光起)	墨画	1枚	129.0	47.3	延宝5年	1677	130010700200
	敵島図屏風下絵(下之屏風)	土佐家(光起)	墨画	1枚	126.8	47.7	延宝5年	1677	130010700300
	敵島図屏風下絵(下之屏風)	土佐家(光起)	墨画	1枚	123.1	47.8	延宝5年	1677	130010700400
	敵島図屏風下絵(下之屏風)	土佐家(光起)	墨画	1枚	129.0	48.2	延宝5年	1677	130010700500
	敵島図屏風下絵(下之屏風)	土佐家(光起)	墨画	1枚	129.2	48.2	延宝5年	1677	130010700600
	敵島図屏風下絵(下之屏風)	土佐家(光起)	墨画	1枚	127.0	47.5	延宝5年	1677	130010700700
	敵島図屏風下絵(下之屏風)	土佐家(光起)	墨画	1枚	133.7	47.8	延宝5年	1677	130010700800
K	松島図屏風下絵	土佐家(光起)	墨画	1枚	138.4	63.5	江戸時代中期	17th century	130011330100
	松島図屏風下絵	土佐家(光起)	墨画・部分膠彩	1枚	138.1	63.9	江戸時代中期	17th century	130011330200
	松島図屏風下絵	土佐家(光起)	墨画	1枚	83.9	64.0	江戸時代中期	17th century	130011330300
	松島図屏風下絵	土佐家(光起)	墨画	1枚	111.5	64.0	江戸時代中期	17th century	130011330400

記号	名称	作者不詳	技法	員数	法量(縦)cm	法量(横)cm	制作年	(西曆)	収蔵番号
K	松島図屏風下絵	土佐家(光起)	墨画	1枚	139.3	63.0	江戸時代中期	17th century	130011330500
	松島図屏風下絵	土佐家(光起)	墨画	1枚	140.0	62.9	江戸時代中期	17th century	130011330600
	塩竈図屏風模本	作者不詳	墨画・膠彩	1枚	106.4	53.9	江戸時代前期	17th century	130010640100
	塩竈図屏風模本	作者不詳	墨画・膠彩	1枚	106.4	53.5	江戸時代前期	17th century	130010640200
	塩竈図屏風模本	作者不詳	墨画・膠彩	1枚	106.8	53.2	江戸時代前期	17th century	130010640300
	塩竈図屏風模本	作者不詳	墨画・膠彩	1枚	107.4	53.0	江戸時代前期	17th century	130010640400
	塩竈図屏風模本	作者不詳	墨画・膠彩	1枚	108.8	53.0	江戸時代前期	17th century	130010640500
	塩竈図屏風模本	作者不詳	墨画・膠彩	1枚	108.0	53.0	江戸時代前期	17th century	130010640600
	松島図屏風模本	作者不詳	墨画・膠彩	1枚	107.3	53.1	江戸時代前期	17th century	130011460100
	松島図屏風模本	作者不詳	墨画・膠彩	1枚	108.6	53.1	江戸時代前期	17th century	130011460200
	松島図屏風模本	作者不詳	墨画・膠彩	1枚	107.9	53.5	江戸時代前期	17th century	130011460300
	松島図屏風模本	作者不詳	墨画・膠彩	1枚	107.6	53.0	江戸時代前期	17th century	130011460400
	松島図屏風模本	作者不詳	墨画・膠彩	1枚	107.1	53.4	江戸時代前期	17th century	130011460500
松島図屏風模本	作者不詳	墨画・膠彩	1枚	108.2	53.1	江戸時代前期	17th century	130011460600	
L	吉野山図屏風下絵	土佐家	墨画	1枚	103.2	45.9	江戸時代中期	17th century	130013960100
	吉野山図屏風下絵	土佐家	墨画	1枚	102.8	46.8	江戸時代中期	17th century	130013960200
	吉野山図屏風下絵	土佐家	墨画	1枚	102.8	47.1	江戸時代中期	17th century	130013960300
	吉野山図屏風下絵	土佐家	墨画	1枚	103.0	46.0	江戸時代中期	17th century	130013960400
M	洛中洛外図屏風下絵	土佐光成	墨画	1枚	132.9	62.2	元禄2年	1689	130011540100
	洛中洛外図屏風下絵	土佐光成	墨画	1枚	133.2	62.3	元禄2年	1689	130011540200
	洛中洛外図屏風下絵	土佐光成	墨画	1枚	133.4	63.6	元禄2年	1689	130011540300
	洛中洛外図屏風下絵	土佐光成	墨画	1枚	132.7	63.5	元禄2年	1689	130011540400
	洛中洛外図屏風下絵	土佐光成	墨画	1枚	132.5	63.6	元禄2年	1689	130011540500
	洛中洛外図屏風下絵	土佐光成	墨画	1枚	132.9	64.5	元禄2年	1689	130011540600
N	歌絵押絵貼屏風下絵(業平)	土佐家	墨画	1枚	75.4	41.4	江戸時代中期	17th century	130011010100
	歌絵押絵貼屏風下絵(公経)	土佐家	墨画	1枚	75.4	40.8	江戸時代中期	17th century	130011010200
	歌絵押絵貼屏風下絵(式子内親王)	土佐家	墨画	1枚	76.1	40.9	江戸時代中期	17th century	130011010300
	歌絵押絵貼屏風下絵(家隆)	土佐家	墨画	1枚	74.2	41.0	江戸時代中期	17th century	130011010400
	歌絵押絵貼屏風下絵(定家)	土佐家	墨画	1枚	75.4	40.9	江戸時代中期	17th century	130011010500
	歌絵押絵貼屏風下絵(順徳院)	土佐家	墨画	1枚	76.4	41.1	江戸時代中期	17th century	130011010600
	歌絵押絵貼屏風下絵(通光)	土佐家	墨画	1枚	75.3	40.7	江戸時代中期	17th century	130011010700
	歌絵押絵貼屏風下絵(俊成)	土佐家	墨画	1枚	76.2	41.0	江戸時代中期	17th century	130011010800
歌絵押絵貼屏風下絵(俊成)	土佐家	墨画	1枚	76.0	41.2	江戸時代中期	17th century	130011010900	
O	関東御用名所図屏風下絵	土佐光芳	墨画・部分膠彩	1巻	33.0	1052.0	江戸時代中期	18th century	130012520100
O	御即位新調道具屏風下絵(耕作図)	土佐光芳・光淳・光貞	墨画膠彩	1枚	48.5	48.6	宝暦13年	1763	130010520100
	御即位新調道具屏風下絵(耕作図)	土佐光芳・光淳・光貞	墨画膠彩	1枚	48.4	48.6	宝暦13年	1763	130010520200
	御即位新調道具屏風下絵(七夕)	土佐光芳・光淳・光貞	墨画膠彩	1枚	42.7	92.8	宝暦13年	1763	130010530100
	御即位新調道具屏風下絵(端午)	土佐光芳・光淳・光貞	墨画膠彩	1枚	42.7	93.2	宝暦13年	1763	130010530200
	御即位新調道具屏風下絵(衣配)	土佐光芳・光淳・光貞	墨画膠彩	1枚	43.3	90.0	宝暦13年	1763	130010530300
	御即位新調道具屏風下絵(絵合)	土佐光芳・光淳・光貞	墨画膠彩	1枚	43.3	90.2	宝暦13年	1763	130010530400
	御即位新調道具屏風下絵包紙	土佐家	書跡	1枚	73.4	35.6	宝暦13年	1763	130010510200
	大宋屏風下絵	土佐光貞	膠彩	1巻	39.7	640.5	安永3年	1774	130015080100
R	洞中銭形屏風下絵	土佐光貞	墨画膠彩	1枚	30.7	84.3	寛政2年	1790	130010600100
	洞中銭形屏風下絵	土佐光貞	墨画膠彩	1枚	30.4	82.3	寛政2年	1790	130010600200
	洞中銭形屏風下絵	土佐光貞	墨画膠彩	1枚	30.2	82.7	寛政2年	1790	130010600300
	洞中銭形屏風下絵	土佐光貞	墨画膠彩	1枚	30.8	83.9	寛政2年	1790	130010600400
	洞中銭形屏風下絵包紙	土佐家	書跡	1枚	50.0	35.9	寛政2年	1790	130010600500
	禁中銭形屏風下絵	土佐光貞・光時・光孚	墨画膠彩	1枚	27.6	79.6	寛政2年	1790	130010610100
	禁中銭形屏風下絵	土佐光貞・光時・光孚	墨画膠彩	1枚	27.6	80.0	寛政2年	1790	130010610200
	禁中銭形屏風下絵	土佐光貞・光時・光孚	墨画膠彩	1枚	27.5	79.7	寛政2年	1790	130010610300
	禁中銭形屏風下絵	土佐光貞・光時・光孚	墨画膠彩	1枚	27.5	79.5	寛政2年	1790	130010610400
	禁中銭形屏風下絵	土佐光貞・光時・光孚	墨画膠彩	1枚	27.5	79.6	寛政2年	1790	130010610500
	禁中銭形屏風下絵	土佐光貞・光時・光孚	墨画膠彩	1枚	27.8	80.8	寛政2年	1790	130010610600
	禁中銭形屏風下絵包紙	土佐家	書跡	1枚	50.0	35.9	寛政2年	1790	130010610700
	禁中銭形屏風下絵包紙	土佐家	書跡	1枚	54.9	46.2	寛政2年	1790	130010610800
S	松鷹竹鶴図屏風下絵(松鷹)	土佐光貞	墨画	1枚	170.8	64.1	江戸時代後期	18th century	130010980100



記号	名称	作者不詳	技法	員数	法量(縦)cm	法量(横)cm	制作年	(西暦)	收藏番号
S	松鷹竹鶴図屏風下絵(松鷹)	土佐光貞	墨画	1枚	170.0	191.6	江戸時代後期	18th century	130010980200
	松鷹竹鶴図屏風下絵(松鷹)	土佐光貞	墨画	1枚	170.7	128.2	江戸時代後期	18th century	130010980300
	松鷹竹鶴図屏風下絵(竹鶴)	土佐光貞	墨画	1枚	170.8	127.9	江戸時代後期	18th century	130011120100
	松鷹竹鶴図屏風下絵(竹鶴)	土佐光貞	墨画	1枚	169.7	127.5	江戸時代後期	18th century	130011120200
	松鷹竹鶴図屏風下絵(竹鶴)	土佐光貞	墨画	1枚	170.3	127.0	江戸時代後期	18th century	130011120300
	松鷹竹鶴図屏風小下絵	土佐光貞	膠彩	1巻	31.0	239.6	江戸時代後期	18th century	130011490100
T	栄花物語図屏風下絵(月の宴)	土佐家	墨画	1枚	71.1	284.9	江戸時代後期	18th century	130011960100
U	飛香舎銭形屏風下絵(古今集和歌意)	土佐光清	墨画	1枚	117.2	49.7	安政3年	1856	130010930100
	飛香舎銭形屏風下絵(古今集和歌意)	土佐光清	墨画	1枚	117.1	49.5	安政3年	1856	130010930200
	飛香舎銭形屏風下絵(古今集和歌意)	土佐光清	墨画	1枚	116.6	50.3	安政3年	1856	130010930300
	飛香舎銭形屏風下絵(古今集和歌意)	土佐光清	墨画	1枚	117.8	49.8	安政3年	1856	130010940100
	飛香舎銭形屏風下絵(古今集和歌意)	土佐光清	墨画	1枚	117.2	50.0	安政3年	1856	130010940200
	飛香舎銭形屏風下絵(古今集和歌意)	土佐光清	墨画	1枚	117.4	49.7	安政3年	1856	130010940300
	飛香舎銭形屏風小下絵(古今集和歌意)	土佐光清	墨画	1枚	39.8	116.4	安政3年	1856	130011280100